

# 日光市の景観計画策定支援のためのモニタリング調査\*

## Monitoring Survey for Landscape Planning on Nikko City\*

古屋秀樹\*\*・福田 栄仁\*\*\*・福島 淳\*\*\*\*・磯 年和\*\*\*\*\*

By Hideki FURUYA\*\*・Eihito FUKUDA\*\*\*・Atsushi FUKUSHIMA\*\*\*\*・Toshikazu ISO\*\*\*\*\*

### 1. はじめに

栃木県日光市では、平成11年に社寺が世界遺産登録されるとともに、年間600万人以上の観光客が訪れており、「観光」が主要産業として位置づけられる。一方、良好な街並み環境整備のために現在、市民と市の協働による景観計画の策定が進められている。そのため、市民サイドからの景観形成のみならず、第三者（観光客等）の視点からも「景観」を検証し、魅力ある景観形成を進めていくことも必要不可欠と考えられる。

そこで、本調査では、「よそ者、若者」の視点を想定して、東洋大学国際観光学科学生をモニターとして設定した。これら学生による現地調査を通じて、観光客・来街者の視点から、景観上「良い事例・取組」、「改善が必要な事例・取組」の抽出を行った。本研究は、これら調査方法に関する検討過程を紹介するとともに、調査を通じた日光の観光・景観に係る来訪事前イメージとの一致・乖離について明らかにすることを目的とする。

### 2. 対象地域ならびに調査方法について

#### (1) 日光市における景観形成への取組状況

日光市では、「千年を振り返り、千年を見据えた輝く日光の創造」をメインテーマとした都市計画マスタープラン策定(H16.3)や、5つの景観形成基準を明示した日光市街並み景観条例(平成17.4)の策定等、行政サイドの取組みとともに、住民組織である日光東町まちづくり推進委員会ワーキンググループによる「日光東町まちづくり規範」が策定され、より具体的な建築・デザインが例示されるなど積極的な景観形成が試みられてきた。

さらに、日光市が景観行政団体となり、より一層積極的な景観形成に取り組むため、現在景観計画を策定中である。ここでは、住民を中心とした検討がなされている

\*キーワード：景観、空間整備・設計、観光・余暇

\*\*正員、博士(工学)、東洋大学国際観光学科

(群馬県邑楽郡板倉町泉野、TEL+FAX.0276-82-9158)

\*\*\*日光市都市整備課

\*\*\*\*(独)都市再生機構まちづくり支援室

\*\*\*\*\* (株)栃木都市計画センター

が、生活空間である地域が「観光地空間」としても機能するため、観光客の評価も確認する必要がある。

#### (2) 住民と観光客による評価の差異

住民と異なる評価主体を設定するため、あらかじめ両者の差異を明確にして、それらをモニタリング調査に反映させることが重要である。この両者の差異として、下記の2点が考えられる。

A. 観光資源・施設や各種店舗の情報量(情報量の少ない観光客)

B. 来訪以前の期待との比較を通じた空間・景観評価(多様な「思い入れ」を持つ観光客)

住民に対して、地域の情報量が少ない観光客の評価は、五感を通じた「直感」によるものが大きいと考えられる(A)。また、Bでは、観光行動が「確認行動」であると考えたと、「来訪以前の期待」を「来訪中の経験」によって如何に充足させるかが重要といえる。この「事前の期待」が居住地の風景や利用情報媒体、個人の嗜好等によって多様化していることも考えられる。観光客の評価を高めるためには、この事前の期待の充足とともに、良い意味での「意外性・"タナボタ"体験」を通じた観光客のより高い効用獲得も重要と考えられるため、この2点を調査で考慮する。

これら以外に、来訪回数、前回との時間差などの来訪経験や「観光行動・周遊を通じた空間・景観の「移り変わり・連続(シーケンス)」としての評価」による影響も大きいと考えられる。特に後者は、単一地点の評価だけでなく、それらの連続による景観・場が展開され、これにともなう評価の変化によるものである。これは特に、多くの観光客が移動の方向性、ベクトルをもつ「参道」、「ハイキングルート」、「回遊式庭園」のような観光周遊場面で考慮する必要性が高いが、調査ルートの自由性を確保するために今回の調査項目から除外した。

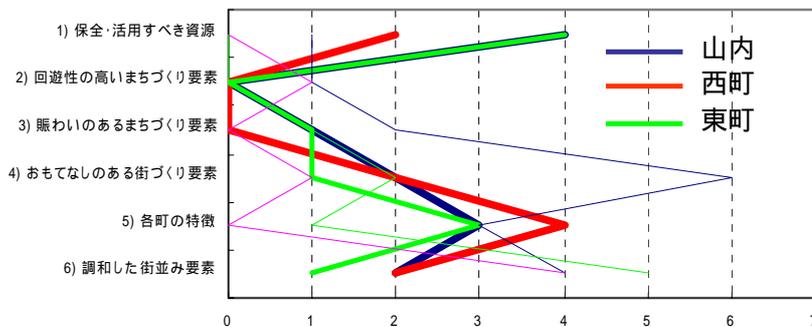
#### (3) 調査方法について

##### 1) 調査グループの設定

観光客属性との一部乖離が考えられるが、写真の撮影、景観の評価理由等の作業のため、モニターとして東洋大学国際観光学科学生を設定した。さらに表-1に示すよ



場と景観対象として「主対象」と「対象場」が存在する。この主対象は多様なレベルが考えられるが、景観計画における個別事物へのフィードバックを念頭として最小区分で整理することとした。これらを踏まえ、最終的な評価を各チームでまとめている。



### 3. 調査結果

現地調査は、平成17年10月30日(日)、10月31日(月)の2日間にわたり、現地調査を行った。観光リアルチームの調査ルートは、2班いずれも有数の観光資源を周遊できるウォーキングトレイル(日光駅起点 東町 山内地区 西町 日光駅終点)に概ね沿ったものとなった。図-3は、ルート上の事物を観察し、各グループで指摘された景観上「良い事例・取組」、「改善が必要な事例・取組」の指摘数(代表的な1班)を示したものである。個別地点の重要度は考慮できていないものの、地区別の特性、改善点が必要な箇所数等を把握できた。これら踏査を通じて、概ね各地域に対して、以下のようなイメージを受けた。

東町地区：昔ながらの建物が多く残されていて、歴史を感じた。しかしながら、景観としてそれが十分活用されておらず、逆に不自然な場所も多いように感じた。

山内地区：社寺特有の香りや雅楽の音、またこの先保全していきたい良い景観が多く見られる。しかし観光地としてのレベルが高い分、ホスピタリティの少なさが気になった。

西町地区：静かで落ち着きのある、豊富な水流と石畳の印象が強い。一方、新旧の建物が混在している部分が若干目立った。

次に、住民(市役所担当者)と観光客(学生)との比較を念頭とした点について、調査結果を示す。

#### A. 観光資源・施設や各種店舗の情報量(情報量の少ない観光客)

学生による景観上の指摘地点(リアルチーム)と市担当者(市民サイド)の指摘地点との比較を通じて、情報量の多少による影響を考えると可能となる。まず、学生から指摘がなかった地点として、稲荷町付近(東町)がある。そこは、日光街道から離れるため、観光客の認知が高くないことによると考えられる。一方、指摘が重なった西町地区においても、ウォーキングトレイル案内図への例示によるところが大きい。このように主要な観光資源、観光ルートに偏るリアルチームの指摘地点に対して、市担当者指摘地点は広範に点在する。路地や西町地区な

図-3 地区別に指摘した景観箇所数

(横軸:指摘箇所数。太線:良好な地点、細線:改善が必要と考えられる地点)

ど、観光客には高い認知とは言い難い地点においても評価の高い資源が整備、現存するため、今後はその「活用」が重要と考えられる。それに当たっては、徒歩による来訪者に加え、自動車利用来訪者にも「参拝」というストーリーを体験できるように、駐車場立地、周遊ルート設定を考慮する必要があるといえる。

#### B. 来訪以前の期待との比較を通じた空間・景観評価(多様な「思い入れ」を持つ観光客)

調査を通じて特徴的で印象に残った地点およびその原因について抽出するとともに、来訪前後のイメージの一致、乖離について整理を行い、現地の特性把握を試みた。

##### 1) 東町地区

日光街道に対しては、「国道119号線で、個人商店や空き家を含め日光特有の建築方式である切妻造りが立ち並び、歴史的文化を持つ日光市のイメージに一致」や「神橋付近の趣のある店舗は日光のイメージに一致」などの意見がある一方、「全体的な統一感不足(看板や電線によるものが大きい)」、「全体のバランスとしては統一性が無く、事前印象とのギャップが大きかった」など改善点指摘があった。一方、東武日光駅を出てはじめて目にする景観において、「山の稜線を損なう看板が目につき、日光イコール自然が豊富な町という印象とは一致しないように感じられる」とのコメントも見受けられた。

以上より、参道では、一部建物や切妻造りの街並みについて評価がなされた一方、看板、電線など景観上目に付きやすい事物に対する指摘があった。また、裏路地の資源に対する評価の高さが特徴といえる。

##### 2) 山内地区

「長坂から見られる紅葉の山々は日光に対する事前印象と一致」、「東照宮前の参道では、事前印象と一致。さらに、道の構造に遠近法が使われていることなど、話を聞くことで知識を得ることができた。もし、それが無ければ、ただ山内地区の道のひとつに過ぎなかったと考えられ、パンフレットによる情報提供を通じて、さらに景観としての表参道を楽しむことができるのではないだろうか」、「二荒山神社付近で聞こえた雅楽の音にとて落ち着きを感じる」や「線香が豊かに香る」など事前印象との一致、プラスの驚きなどが指摘として多い。

一方で、「建築物・自然がきちんと整備されている分、その直接的な観光資源以外の設備や景観整備不足が目立ってしまうように感じる」との指摘もあり、これらには神橋(交通量の多さ)、山の稜線(高圧線鉄塔)、境内への車両乗り入れ(接触の危険性)、トイレ(デザイン、衛生面)などが該当する。山内地区ではもともとの景観整備水準が高いため、小さな問題点でも着目される特徴を有する。

3)西町地区  
 「西町地区の事前印象は、住宅街で、特に何も無い町というものだった。実際には自然と水に恵まれ、自分の足音が聞こえるほどの静寂がある」との指摘が多く、「御用邸正門から憾満ヶ淵まで徒歩20分でうおいにあふれた空気感が感じられ、住宅空間と自然空間が隣接し、日光市=水の町ということ強く実感することが出来、良いギャップを感じた」。その他として「全体的に調和が取れている」、「各住宅の高さに統一感があり、外壁も黒や茶など落ち着いた色が多く、日光市=落ち着いた町という雰囲気を出している。観光に関する案内も所々に設置されており、町の風景に調和」等の意見があり、景観・観光面でのポテンシャルの高さ、およびその有効活用の積極的検討が考えられる。

一方、「国道120号沿いにあるいくつかの店舗の看板は、数が多いうえ大きく、看板の背景の色の明度が高いため目立つ。また高い位置にある看板が山の紅葉、遠景を目立たないものになっているため、落ち着いた和の色や茶色など目立たない色を使用や設置位置の検討が考えられる。」といった指摘も一部であった。

#### 4)まとめ

以上の調査を踏まえ、景観計画に活用可能な情報として、学生の周遊ルートが「代表的」資源を連結するものとなり、そこにおける景観整備の重要度が高い、事前評価が高い山内地区は、小さなミスマッチでも印象に残る、東町、西町地区では、統一感についての指摘があり、特に街道としてのシーケンス景観形成へのニーズが高い、などが抽出できた。

#### 4.まとめ

本研究では、住民と異なる観光客(学生)の評価視点を把握し、景観計画への情報提供を意図したモニタリング調査を実施した。そのため、情報量の差異が事物の評価に与える影響、事前・事後の比較を通じた景観・地域への評価の違いを分析した。

分析の結果、情報量の差異は資源自体の認知に大きく影響するとともに、個別資源の情報量は観光資源としての評価を向上させる効果が考えられた。また、日光地域では、「石」、「水」等の事前では未認識・低評価であった資源が訪問を通じて高評価となった事例が存在するため、これらの活用が景観計画、観光地としての活性化におい

て重要であると考えられる。

また、「観光客の来訪満足度が事前の予想への充足やそれ以上の驚きによって規定される」との観点から、日光地区全体における事前と事後評価との対比として、図-4に示す概念図を作成できる。

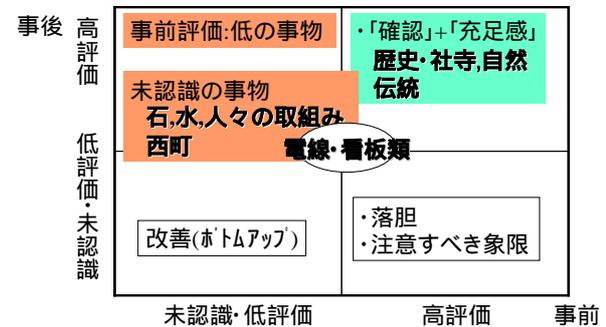


図-4 景観要素に対する事前・事後比較

事前事後いずれの評価も高い評価要素は、「歴史・社寺」、「自然」、「伝統」が該当し、未認知であったものが事後に高評価となったものとして「石」、「水」、「人々の取り組み」、「西町」が該当した。また、電線や看板類、トイレ等の修景など、些細なものであるが観光客の目線に留まり、印象が良好でないものについても指摘があった。これらについては、観光客へのホスピタリティ、質の高い交流空間の形成に最低限必要項目として位置づけることから、基本的な改善点と考えられる。

また、モニターである学生を大きく2つの性向に分類できると考えられる。良好な景観、観光資源から受ける評価が著しく大きく、若干の問題箇所は全体評価に影響を与えないグループに加えて、目にする景観上の問題箇所の評価がマイナス方向に大きな影響を与え、全体の印象が大きく悪化するグループの存在である。調査員の多くは、前者に該当しており、日光に対する全体的評価は極めて高いものとなったが、後者のような評価性向の観光客も考えられることから、景観が良好な地点の創出、活用、保持とともに、小さな問題箇所の改善を同時に図ることが、多様な観光客のサービス水準向上に寄与すると考えられる。

#### 参考文献

- 1) 齋藤大, 佐藤友祐, 宮本史大: 住民による沿道景観診断の実施手法と活用に関する研究, 土木計画学研究・講演集, Vol.33(CD-ROM), 2006.6
- 2) 小路剛志, 藤田光一: 景観評価指標を用いた都市河川の景観分析, 土木計画学研究・講演集, Vol.33(CD-ROM), 2006.6
- 3) 柴田久, 溝上章志: 景観計画における市民参加のための合意形成型デザイン手法に関する研究, 1998年度第33回(4)日本都市計画学会学術研究論文集, pp.751-756, 1998.10
- 4) 景観まちづくり研究会編著: 景観法を活かす, 学芸出版社, 2004
- 5) (社)日本建築学会編: 景観法と景観まちづくり, 学芸出版社, 2005
- 6) (独)都市再生機構: 全国都市再生に資するまちづくり方策検討調査業務報告書(日光市世界遺産「日光の社寺」及び門前町地区), 2006.3